



靖國神社拝殿と桜



第155号

公益財団法人 特攻隊戦没者 慰霊顕彰会
 編集人 金子敬志
 発行人 石井光政
 印刷所 株式会社 SGネクスト
 ホールディングス

目次

各地慰霊祭等報告

第46回特攻隊全戦没者慰霊祭 編集長 金子敬志 2

神雷部隊慰霊祭理事 評議員 中村敏弘 6

宮崎縣護國神社「特攻勇士之像」慰霊祭 理事長 岩崎 茂 8

会員等投稿

多田野語録 会員 多田野弘 9

万事修養 2050年の日本を考える 9

言葉と文化をこえて 理事 宮本雅史 11

特攻隊員家族への手紙 瀬野キヨ子 15

ト號空中勤務必携(1) 編集長 金子敬志 18

連載 山ある記30 会員 池田康博 30

顕彰譜(15) 31

芸欄 歌俳柳の広場

短歌・俳句・川柳 35

事務局からの報告等

一 令和6年度事業報告書 36

二 寄付者 38

三 新入会員 39

四 会員計報 39

挿絵提供 空自OB 宇山氏

第46回特攻隊全歿死者慰霊祭

編集長 金子 敬志

慰霊祭

令和7年3月29日(土) 11時~12時

於：靖國神社拝殿・本殿

式次第

国歌斉唱

トランペット

堀田 和夫
町 ともみ

修拔、献饌 祝詞奏上

祭文奏上

献吟

理事 長 岩崎 茂
一誠流 竹内 一香
龍 笛 安藤 韶盟

献歌「ふるさと」「翼をください」

ソプラノ歌手 伊吹 笑美子

全員斉唱 「同期の桜」「海ゆかば」

トランペット

堀田 和夫
町 ともみ

昇殿参拝

玉串奉奠

黙 禱

「国の鎮め」

トランペット

堀田 和夫
町 ともみ

令和7年3月29日(土) 11時より、靖

國神社において第46回特攻隊全戦歿者慰

霊祭が催行され、御遺族26名を始め御来

賓、戦友、一般会員等を合わせ206名

の方々が集集し、英霊に哀悼の誠を捧げ

られました。

肌寒い小雨の降るあいにくの天気では

したが、24日に標本木の開花が宣言された

ためか、境内には雨にもかかわらず多数

の観光客が訪れていました。

9時過ぎ、慰霊祭支援員が集合、

担当部署ごとの打ち合わせを行い、

10時から受付開始に備えました。

時間が近づくにつれ、集殿前に設

けられた受付に参加者が次々に集まっ

て来られました。

お集まり頂いた参加者の皆様に11

時45分から担当者により参集殿内控

室で式次第等の説明が行われ、終了

後、拝殿に向かい全員着席、慰霊祭

開始を待ちました。



祭文を奏上する岩崎理事長



第46回慰霊祭の立て看板と飯田美絵評議員

飯田評議員は飯田正能前編集長のお子さん

開始を待ちました。

開始を待ちました。

時間となり、堀田和夫氏とご令嬢の町

ともみ氏との親娘のトランペット伴奏に

合わせた国歌「君が代」斉唱により慰霊

祭は開始され、修祓、献饌、祝詞奏上に

続き、岩崎理事長が祭文を奏上しました。

祭文奏上に続き、一誠流 竹内一香氏

龍笛 安藤韶盟氏により、次の2首の献

吟が行われました

●第四十三振武隊長 浅川 又之 作

(昭和20年4月6日 沖縄西方海面で

戦死)

桜花と散り九段に還るを夢に見つ

敵艦屠らん我は征くなり

● 第一神雷桜花隊 島村 中 作

(昭和20年三月21日 鹿屋160度360哩の機動部隊で戦死)

大君の辺にこそ散らん桜花

今度咲く日は九段の社やしら

終わって、ソプラノ歌手伊吹笑美子氏による「ふるさと」と「翼をください」の献歌、続いて堀田和夫氏・町ひとみ氏によるトランペット演奏に合わせて全員が「同期の桜」「海ゆかば」を斉唱して拝殿における行事が終わり、この後、参列者は本殿に昇殿して玉串を奉奠して、参拝しました。

最後に、堀田和夫氏・町ひとみ氏によるトランペット演奏「国の鎮め」に合せて黙祷を捧げて慰霊祭は終了となりました。

二 特攻勇士之像献花式

昇殿参拝後、遊就館前にある「特攻勇士之像」に対する献花が行われました。

この日は前述のように雨模様で、献花の際には雨避けについて心配しましたが、献花が行われる頃にはやや小降りとなり、補助者を配して、無事実施出来ました。

献花は参列者を代表して、御遺族代表 臼田智子様(第23振武隊 伍井芳夫中佐御令嬢) 御来賓代表 日本郷友連盟専務理事 越智道隆様 当顕彰会代表 藤田幸生会長のお三方が実施し、参列者一同

特攻勇士之像への献花



は代表に合わせて礼拝されました。

これをもって慰霊行事は全て終了し、靖国会館に於ける直会に移行しました。

三 慰霊祭直会

令和7年3月29日(土)

12時40分～14時20分

於：靖国会館2階「九段の間」 「田安の間」 「玉垣の間」

慰霊行事終了後、「靖国会館」会館2階の「九段の間」「田安の間」「玉垣の間」において直会が開催されました。

石井事務局長の開式の辞に続き岩崎茂理事長より挨拶が行われました。

ご遺族紹介及びご来賓紹介、佐藤正久参議院議員並びに一般財団法人日本遺族会会長溝落敏栄様からの慰霊電報披露に続き、ご来賓を代表して、靖国神社宮司大塚海夫様によるご挨拶が行われ、その後

懇談・会食となりました。

時間が経過し、話は尽きませんでした。時間経過の時間が迫って来たので、慰霊祭においても献歌されたソプラノ歌手伊吹笑美子氏による「君が代」が独唱された後、堀田和夫氏・町ひとみ氏によるトランペット演奏に合わせて全員により「海ゆかば」を斉唱が行われて直会の予定を終了、石井事務局長の閉式の辞により直会はお開きとなりました。



ご挨拶をされる大塚海夫靖国神社宮司

この度、第46回特攻隊全戦没者
慰霊祭の開催にあたり、会の皆様方
のご尽力に敬意を表します。

国家に殉じた英霊が安らかに眠られ
ますことを、お祈り申し上げます。

小職も常に特攻隊全戦没者に想いを
馳せ、日々の公務に当たって参ります。

合掌



“ヒゲの隊長” こと
参議院議員

佐藤 まさひさ

102-0072

東京都千代田区飯田橋1-5-7 東専堂ビル2階

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

理事長 岩崎 茂 様

〒102-0074
東京都千代田区九段南1-6-6
九段会館テラス4階

一般財団法人 日本遺族会

3月27日 午前 午後 なし

至日以降の配達日指定をされた場合のみ配達時間帯希望が可能です。

TEL (03) 3261-5521

① ② ③ ④ 普通用 ⑤

第四十六回特攻隊全戦没者慰霊祭のご奉行にあたり、平和の礎となられました尊い御霊に対し、謹んで哀悼の意を表します。

我が国の今日の平和と繁栄をもたらしたものは何であつたのか、いま改めて思う時、世界に目を向ければ未だに紛争が堪えず、罪のない大切な命が失われ続けている。時代の変化の中で苦しみや悲しみはそれぞれにあれど、ご英霊の皆様は二度と私達と同じような遭難を繰り返してはならないという強い決意を持たせ、困難を乗り越えてゆく力を後世に残されたのだと、私も戦没者の遺児の一人として新たに感じております。平和の尊さ、命の大切さを後世に語り継いでいかなければなりません。

皆様方には「平和を語り継ぐ者」として、今後とも末永くお力添えいただければ幸いです。

結びに、ご参集の皆様方のご健康、ご多幸を心からお祈り申し上げます。

一般財団法人 日本遺族会
会長 水落 敬 栄

令和6年度神雷部隊慰霊祭

評議員 中村 敏弘

令和7年3月21日(火)、二日前の雪と寒さが嘘のように、青空と春の日差しが広がる中、北鎌倉の建長寺正統院にて行われた「神雷部隊慰霊祭」に参列しました。

建長寺は臨済宗建長寺派の大本山であり、その敷地内には12の小寺が点在して



正統院本殿



洞窟奥に安置された「神雷戦士の碑」

いますが、今回の慰霊祭が執り行われた正統院はその一つです。正統院の門を過ぎた左手には院の墓地が広がり、その奥の洞窟に「神雷戦士の碑」が安置されています。碑には、第721海軍航空隊、すなわち神雷部隊における戦没者829名の官姓名を刻んだ「海軍神雷部隊戦没者芳名」が祀られており、その英霊を慰めるべく参拝者が集いました。

神雷部隊が最初に出撃したのは昭和20年3月21日、鹿屋基地から発進した「桜花」

攻撃隊でした。この日、全機が撃墜され、野中五郎隊長以下160名が戦死し、その後も終戦間際まで連続して出撃を重ねました。「神雷戦士の碑」は、戦後、元隊員であり建長寺正統院の住職でもあった竹谷行康氏をはじめ、神雷部隊の元隊員の尽力によって建立されました。この慰霊碑は、昭和20年3月21日の初出撃にちなみ、昭和48年から毎年この日に慰霊祭が行われています。

今年の慰霊祭は、穏やかな初春の陽気に包まれた中、故・足立次郎少佐の三男である足立尚史氏をはじめ、神雷部隊関係者約10名や、海上自衛隊横須賀地方総監部管理部長・三好1海佐を含む約40名が参列し、厳粛に執り行われました。慰霊祭の始めに、参列者全員による黙祷が捧げられ、その後、湘南水交會会長の眞木信政氏による追悼の辞が述べられました。続いて、正統院の雪任職とその子息である副住職による読経が奏され、参列者は焼香と拝礼を行い、英霊を慰めつつ、国の安寧と家族の平和を祈念しました。また、参列者一同は、平和で繁栄する日本を築くために一層努力することを誓いました。

慰霊祭は「神雷戦士の碑」の前での記念撮影で終わり、その後、参列者は正統

院本堂に移り、例年通り茶話会が開かれました。

茶話会では、眞木会長の挨拶とともに神雷部隊関係者の紹介が行われ、その後約1時間にわたる和やかな懇談が続きました。最後には、住職よりご挨拶がありました。住職は、最近、若い世代がSNSや様々なメディアを通じて神雷部隊に関心を抱き、「神雷戦士の碑」を訪れるようになったことを触れ、これからもこ



記念撮影

の慰霊祭が継続されることの重要性について言及されました。

来年の再会と国家安寧を誓いながら、建長寺正統院を後にした慰霊祭でありましたが、神雷部隊関係者の中には初めて参列された方もおられ、また、若い世代においても神雷部隊の歴史が少なからず浸透している現実を目の当たりにし、改めて特攻という歴史的事実を後世に伝えることの重要性を深く感じました。

神雷部隊のような特攻隊の歴史は、戦争の悲惨さとともに、命をかけて国を守ろうとした人々の強い決意を伝えており、その精神を尊重し、後世に伝えていくことが大切だと改めて思いました。また、若い世代がSNSやメディアを通じて神雷部隊に関心を寄せていることは、非常に重要な変化だと感じました。戦争の歴史を知り、記憶を継承していくことが、未来の平和を築くためにも欠かせないことだと思えます。そういった意味で、慰霊祭が今も続いていること、そしてその意義を感じ取る若い世代が増えていることは、希望の光のように感じられました。



茶話会においてお話をされる雪導師

宮崎縣護國神社での「特攻勇士之像」慰
霊祭参加報告

岩崎 茂

前日の豪雨が嘘だったかの様に晴れ上がり、清々しい空気の下で、宮崎縣護國神社での「特攻勇士之像」慰霊祭が厳粛なまでにも肅々と執り行われました。宮崎県の桜の開花宣言の4日後の3月28日でしたので、まだ満開ではありませんでしたが、綺麗な桜の下で御英霊をお迎えすることが出来ました。宮崎縣護國神社に「特攻勇士之像」建立されたのが平成31年3月28日でしたので、毎年この日に慰霊祭を実施してとのこと。今回が7回目の慰霊祭でした。

一時期、コロナで慰霊祭の規模も制限されておりましたが、今年は、何の制限もなく、ご遺族をはじめ、宮崎県選出国會議員秘書の方々、県議会・市議會議員の方々、宮崎神宮・護國神社奉賛会の方々、特攻勇士之像建立宮崎県委員会の方々、宮崎県隊友会等の地元の自衛隊OB会の皆様、そして現職の自衛官等々、多くの方々のご参列を頂き執り行われました。主催が宮崎縣護國神社でしたので、宮崎神宮と護國神社の宮司を兼務されておられる本部様にもご参列頂きました。

鳥居越しに見る宮崎縣護國神社拝殿



特攻隊戦没者慰霊顕彰会（以降「特攻顕彰会」という）は、平成19年から、全国各地の護國神社に「特攻勇士之像」を奉納させて頂き、これまでに21府県の護國神社に収めることが出来ています。漸く半数程度です。全国には52の護國神社が存在しております。全国には52の護國神社には護國神社がありませんが、北海道に

は旭川・札幌・函館の三か所に、その他にも複数の護國神社が所在しています。そのすべてに奉納することが出来ないかもしれませんが、出来るだけ多くの護國神社に奉納し、護國神社を訪れてくださる皆様方の目に触れ、少しでも興味を持っていただければと考えております。「特攻顕彰会」のHPに奉納が完了した護國神社名が掲載されています。ご確認の上、知人・友人をお誘いされ、参拝して頂ければと思います。



宮崎県特攻勇士之像

多田野語録
 万事修養
 株式会社タダノ最高顧問 多田野 弘

このテーマを見て思い出したのは、司馬遼太郎の「振り返ってみると、私の一生はすべてプラスだった」という言葉である。我が身に起こるすべての出来事には、無駄なことは一つもない。自分に必要だから与えられたのだと述懐している。たとえ好ましくない出来事であっても受け容れ、修養としプラスにできたという。私は修養とは、不撓不屈の精神と人格をつくることだと考えている。不撓不屈といっても、世の中には「私は意志が強い」と自覚できる人は少なく、「なんて私は意志が弱いのだろう」と自省している人の方が多いように思われる。私たちは何か良い習慣を身につけたい、あるいは悪い習慣を止めたい、と相当な決心をして取り組んでも三日坊主になってしまうことが多い。それを何とかしようとして自分に鞭打つのだが、うまくいかない。

これは、肉体を鍛えるのと同様に、弱い意志力を叩いて鍛えればもっと強くなれると思うところに大きな錯誤があるように思う。何故かと言えば、肉体があるように意志という形のものがあるわけではないからだ。肉体を鍛えるように、弱い意志を鞭打ち鍛えることは本来できない相談である。

問題は、「意志や意欲」が自分のどこから出ているかに関係しているように思う。つまり、どこから出ているかによって「三日坊主になるか、やり通すか」の分かれ道となる。それを意志が「弱い、強い」と言っているだけである。意志の出る場所は二つあって、「心」から出る意志は弱く、「魂」から出る意志は強いと言える。ところが、私たちは自分が意識できる心というものが、精神作用の全てと思いついでいて、魂というものの存在をアタマから否定してしまっている。心と魂は別物なのである。

なぜ、心から出る意志が弱く、魂から出る意志は強いのか。心から出る意志が弱いのは、それを強くしようと意図してつくった急ごしらえの意志といえる。魂から発する意志が強いのは、魂は生命と共に、宇宙の意志と繋がっているからだ。私は戦場で幾度も、自分に死を受け容れさせた体験から、魂の偉大な力を知っている。

たものだ、いずれ死ぬなら前から撃たれて死のう」と、すんなり死を決めた。

それ以来、雨降る弾丸の中を平気で動き回れるようになった。自らの変わりように驚いた。その事実が、私の一生を決定づけた「自分が魂の存在である」のを知る決定的瞬間だった。同時に、魂は宇宙の意志を戴して、生命と共にこの世に生を受けていたのだと直観した。

私の戦後80年が魂主導の生き方になったのは当然である。たとえ好ましくない出来事であっても、真正面から受け容れ、あえて厳しいことを自分に課してきた。

その一例は、元日の朝、海での寒中水泳を、44歳から93歳まで49年間、一度も休まず続けたことである。これは私の意志が強かったからではなく、魂の力だった。

戦後読書する中で、それを裏付ける文句が見つかつた。一つは文豪トルストイ著「人生の道」に、「魂は肉体に宿り、心と身体を統御・支配する」と明言している。二つ目の書は、ソクラテスの高弟プラトン著「ソクラテスの弁明」である。

ソクラテスは紀元前450年頃、「魂を養い、徳を高めよ」と、アテネ市民に説いて回っていた。その頃日本は縄文時代の堅穴式住居で、誰もが食べることに一日を費やしていた。それに比しギリシャは既に、魂や徳を理解する精神文化が築

かれていた。私の魂の見解が正しかったのを知って、自信を深めた。

三つ目の書は、ビクター・フランクルの「夜と霧」である。オーストリアの精神心理学者だったユダヤ人の彼は、ドイツのナチスに捕えられ、アウシュビッツ収容所に容れられた。彼は、収容所で人間の意外な行動を目撃した。名前を呼ばれ、国歌を高らかに歌いながらガス室に入っていく者や、若者の身代わりになっていく老人もいた。支給の黒パンを病人の枕元にそつと置いて作業に出て行く者もいた。

これらを見たフランクルは、このような崇高な精神は、人間のどこから出ているのかを考えた。そして戦後、収容所の経験を記した書「夜と霧」に、あの崇高な出来事は、人間の超越的無意識のなせる業であり、日本で言い習わしている魂であると述べている。

いずれにしても、私の魂主導の生き方は、戦後の一生をプラスにしてくれた。元日の寒中水泳一つをとっても、あの冷たさはマイナスだが、やり終えた後はプラスに代わっている。同様に、たとえ好ましくない出来事であっても、プラスに捉え、克己の生き方を万事修養とした。私の経験が皆のプラスになれば幸いである。

多田野語録
2050年の日本を考える
株式会社タダノ最高顧問 多田野 弘

今回の表題は、私の到底及ばない大問題のようである。代わりに最近、気になっていることを述べて、責めを果たしたい。誰が言ったのか憶えていないが、「常識で考える」のではなく、「常識を考えよ」という言葉が長らく気になっていた。「で」と「を」の違いだけなのだが、なぜ常識で考えてはいけないのだろうか。私達の日常生活を振り返ってみても、ほとんど常識に従って行動しているように思う。しかしそういえば、何か問題がありそうな気がする。

常識というのは誰もが知るとおり、時を経ると変っていくものだといわれている。つい最近まで、百歳を超える人が珍しかったが、今は多くの人が百歳を超えるられるようになった。世界的事典エンサイクロペディアは、100年後の内容は80%変わっていると発表している。常識で考えていては時代遅れになると言える。なぜ常識で考えてはいけないのだろうか。それは、かつて私がとった常識を外れた行動が、思わぬ良い結果をもたらしたからだ。私が20歳の徴兵時、すでにその行動が始まっていた。当時は、兵役の義務を嫌がる風潮が常識であった。巷で

は「誰も嫌がる軍隊に志願する馬鹿がいる」と言われていた。私は、早く兵役を済ませ社会で力を発揮したいと、海軍に志願した。

しかし、義務年限が多い海軍志願のわけは、誠に幼稚・単純だった。陸軍は、行軍が主で服装も野暮だったが、海軍はなんと言ってもスマートで、さらに私は海が好きだったからだ。昭和14年10月横須賀海軍航空隊に入隊した。

海軍は殴って教える所だと聞いていたが、その鍛え方は予期した以上に強烈だった。普通3年の兵役を1年で済ますのだからその凄さは当然だったが、私はむしろ進んでその鍛え方を受け容れていた。すると、いつの間にか、鉄拳の痛さを気にしなくなった。1年後、自分が心身共に間違えるほど遅くなった姿に、驚いたことを一昨日の出来事のように覚えている。

兵役を終え予備役退隊したが、翌年10月、召集令状がきて、矢田部航空隊に入隊した。私を待っていたかのように2か月後、12月8日、日米開戦になった。私はすぐに、皆が嫌がる最前線に派遣を申し出たが、私一人だった。行く先はニューギニアの東、ニューブリテン島？ラバウルと知らされた。徴用の貨物船に便乗して日本を出発した。

途中、船長の機転で、開戦直後に海軍が占領したウエーキ島に寄港してくれた。天の配剤だろうか、この時に見た光景が、戦後私の生涯の仕事のもとになったのである。お釈迦様でも御存知ないだろう。赤く日焼けした半裸の米軍捕虜達が、飛行場滑走路の修復をしていた。見たことがない数台の土木機械を運転していたがすべて油圧機構であるのが、整備兵の私にはすぐ分かった。終戦後、復員し、親子3人で機械修理業を始めた時、かつて見たウエーキ島の光景が思い出された。あの油圧を利用してクレーンをつくるという発想が生まれたのである。23歳だった。

乏しい知識と技術しかなかったが、「ダメもと」でやってみようと、寝食を忘れて取り組み、何日間かをかけて試作機をつくり上げた。その構造は単純な油圧機構のつり上げ装置だったが、2トンの能力があった。早速、東京の日通本社に持ち込んで、運転して見せた。幹部の方々は驚き、これは役に立つ、数か所を改善すれば全支店で採用できるだろうと言われた。

やがて、日通本社から多くの発注があり、全国に配備されていった。それを見た他の荷役業者からの注文も加わり、その量は級数的に増えていった。急激な需

要の増大に備えて、会社の規模を拡大せねばならなかった。昭和41年、現在地に約4千5百坪の用地を購入したが、用地の中をJRの高徳線が通っていた。線路で中断された用地は隣接はしていても、長い迂回道路を通してしか利用できなかった。

私は、常識では考えられない奇抜なことを思いついた。線路の下に隧道をつくれば、分割されている土地が一体として有効利用できると考えた。私は南の戦場で3年間戦い抜いた自信があった。怯むことなく局長と面会し、高徳線の下に、自動車専用の隧道をつくらせてもらえないかと真剣に頼んでみた。一週間後、朗報を得た。設計・施工はJRが行い、費用の全額を我社負担という条件で許可された。私の常識を外れた考えが功を奏した。

このような例からも、常識では、新しい発想や創造的な考えは生れないことを学んだ。元日の寒中水泳を49年間休まずに続けたのも、104歳になつてなおこのエッセイを書いている事実にも表れている。2050年の日本がどう変わるか、常識を金科玉条にして「常識で考える」のではなく、「常識を考えよ」と申し上げて、表題の責を果たしたい。

言葉と文化をこえて

理事 宮本雅史

特攻隊員の経歴や思いは様々だが、共通するのは、最終的には「死」を受け入れたという歴史的事実で、多くの搭乗員はその思いを家族や親類縁者、知人に書き残している。中には、人間魚雷回天「金剛隊」の隊員として昭和二十年一月二十一日、ウルシー湾で特攻を敢行し、散華した塚本太郎少尉(当時二十一歳、戦死後大尉)のように自らの声を円盤に録音している隊員もいる。

ニューヨークの「イントレピッド海上航空宇宙博物館」が二〇一九年十一月、「カミカゼ、戦火を越えて (KAMIKAZE: BEYOND THE FIRE)」展を開催し、こうした隊員たちの遺品や写真を公開した。ハワイの「戦艦ミズーリ記念館」は、知覧特攻平和会館と協定を結び、二〇一五年から特攻隊員の遺書など約百点を展示している。二〇二〇年八月十九日付け日本経済新聞によると、来場者からは、「家族にサヨナラを告げなければならなかった人々を思うと心が張り裂けそう」「私たち全員に通じる『葛藤』という人間の側面を示している」といった感想が寄せられているという。

隊員たちの記録は言語の壁を越えて訴

えかけている。

フランス人文学者のモーリス・パンゲは自著『自死の日本史』（ちくま学芸文庫）の中で、塚本大尉ら特攻隊員の死を、
 「日本が誇る自己犠牲の長い伝統の、白熱した、しかしきわめて論理的な結論ではなかっただろうか。それを狂信だと人は言う。しかしそれは狂信どころかむしろ、勝利への意志を大前提とし、次いで敵味方の力関係を小前提として立て、そこから結論を引き出した、何物にも曇らされることのない明晰な論理といふべきものではないだろうか」と分析し、その上で、特攻を狂信だと言い、狂乱だと批判する声に対しては、「彼らにとつては単純明快で自発的な行為であったものが、われわれには不可解な行為に見えたのだ。強制、誘導、報酬、麻薬、洗脳、というような理由づけをわれわれは行つた。しかし実際には、無と同じほどに透明であるがゆえに人の眼には見えぬ、水晶のごとき自己放棄の精神をそこに見るべきであったのだ。心をひき裂くばかりに悲しいのはこの透明さだ。彼らにふさわしい賞賛と共感を彼らに与えようではないか。彼らは確かに日本のために死んだ」と反論している。

元特別操縦見習士官で元リヨン大客員教授の長塚隆二氏は、特攻隊戦没者慰霊

顕彰会発行の会報『特攻』第八号（平成元年）にフランスの政治家でド・ゴール政権で文化相を務めたアンドレ・マルローの特攻隊に対する感想をこう紹介している。

「日本は太平洋戦争に敗れはしたが、そのかわり何ものにもかえ難いものを得た。これは、世界のどんな国も真似のできない特別特攻隊である。彼らには権勢欲とか名譽欲などはかけらもなかった。祖国を憂える貴い熱情があるだけだった。代償を求めない純粋な行為、そこにこそ真の偉大さがあり、逆上と紙一重のファチズムとは根本的に異質である」

「フランス人のなかには、特別特攻隊の出撃機数と戦果を比較して、こんなにすくない撃沈数なのになぜ若いのちをと、疑問を抱く者もいる。そういう人たちに、私はいつもいつてやる。『母や姉や妻の生命が危険にさらされるとき、自分が殺られると承知で暴漢に立ち向かうのが息子の、弟の、夫の道である。愛する者が殺められるのをだまってみずごせるものだろうか？』と。私は、祖国と家族を想う一念から恐怖も生への執着もすべてを乗り越えて、いさぎよく敵艦に体当たりをした特別特攻隊員の精神と行為のなかに男の崇高な美学を見るのである」と。
 ラフカディオ・ハーンは特攻隊員の心

の整理の原点にあるのは「自己犠牲の精神」と総括、著作『心』のなかで、日清戦争に勝利した日本の国力の原動力になつたのは、神道と仏教という二つの伝統宗教によって養われた自己犠牲的、奉仕的国民性だと説いている。

確かに、元特攻隊員の話を聞くと、それぞれが血を吐くような心の葛藤の末、家族や故郷を守り抜き、日本の歴史や文化を未来に引き継ぎたいという思いが勝り、「それを実現するためには自分を犠牲にしても」と自らを納得させて赴いていく。それは隊員たちが残した遺書などの行間に溢れている。

自己犠牲という言葉の響きは心地が良く、マルローがいう「崇高な美学」であるが、特攻隊員は、それを「任務」や「当然」とさりげなく語り、散華した隊員も遺書などでも単に「任務」として処理している。だれも、自己犠牲を強調していないし、名誉栄達を求めた隊員はいない。決断までの「葛藤」と「苦悩」が伝わって来るが、それでもごく自然なのだ。特攻作戦に対する諸外国に驚きを与えた自己犠牲という究極の選択。それがマルローやハーンによる日本人分析と相まって、特攻作戦の是非よりも、「なぜ、日本人は究極の選択ができるのか」という議論になつたとしても不思議ではない。

両軍の攻防を細かく研究していることが明らかになったと、伝えている。

中国側は「ミッドウェー海戦」「ガダルカナル島攻防」「沖繩戦」の三件に絞り、なかでも特攻作戦が大々的に展開された「沖繩戦」については、〈米軍は兵員、兵器と物量で圧倒的な優位にあった。だが、日本側は米軍の当初の上陸部隊を水際でもっとたくことが可能だった。空からの攻撃が海上の巨大な戦艦(大和)を無力にできることを立証した。だが日本側の自爆の神風攻撃はかなりの効果をあげた〉と分析しているとしている。

長年、中国人民解放軍を研究、中国の軍事動向について全米有数の権威とされるCSBAの上席研究員、トシ・ヨシハラは〈将来の米中戦争は日米両軍が戦ったのと同じ広大な海域も予測されるため、中国側はその歴史を重視するだろう〉と解説していると古森は伝えている。



令和四年四月十日、鹿児島県南さつま市の万世特攻慰霊碑「よろずよに」前で行われた万世特攻慰霊碑第五十一回慰霊祭(万世特攻慰霊碑奉賛会主催)に参列した。

陸軍最後の特攻基地とされる万世飛行場からは、昭和二十年三月から四カ月の

間に、十代の少年飛行兵を含む陸軍特攻振武隊百二十一人と第六十六戦隊七十二人、第五十五戦隊六人ら計二百一人が沖繩の空へ飛び立つなどして散華した。

慰霊祭では、万世特攻慰霊碑奉賛会の本坊輝雄会長が、「今年二月にロシア・プーチン政権が、ウクライナに軍事侵攻し、ウクライナ国民の悲惨な状況がテレビ等で放映され、戦時下におけるウクライナ国民の悲痛な叫びと子どもをはじめとする多くの一般市民が犠牲になられることに心の痛む日々であります」と、ロシアのウクライナ侵攻に触れ、「戦後七十七年のわが日本のために尊い命を捧げた皆様方の崇高な精神と使命感、歴史の真実を後世に語り継ぎ、平和社会を築くことは、私たちの責務であることを今、ここに改めてお誓い申し上げます」と、追悼の言葉に繋いだ。

平成二十一年から、資料をもとに来館者に当時の様子や展示品の紹介を続け、慰霊祭に深く関わっている万世特攻平和祈念館の語りべで管理事務員の小屋敷茂さん(当時七十四歳)は、慰霊祭の後、私に慰霊に対する思いを熱く語った。

「戦争というのは人間は鬼になるんだ。人道的という言葉を使うが、戦争は勝つか負けるか。だから鬼になったような作

戦もするんだと思います。だから、世のご遺族は皆さん、何があっても戦争は反対だと言います」

「若い人には、万世特攻平和祈念館に来て、記念館を知って頂きたい。記念館に何が残っているか、特攻隊に行った人が何を残していったのかを知って頂きたいのです。そして、特攻隊員が残した言葉が、どういう意味の言葉なのかを知って頂ければ、普通の平和な生活につながっていくのかなあと思います」

「慰霊祭と国を守ることは表裏一体と、考えないといけないと思います。平和、平和と、平和だけを唱えてもダメ。国を守るためにはどうするかを考えていかないけない。どれだけの武力を持っていいのかわかりません。だけど、国を守るために何をすべきなのか、どうあるべきなのか。今回のロシアのウクライナ侵攻は、我々国民にとって、それを考えるいいきっかけになったと思います。国民の一人一人が日本の国を守るにはどうすべきかを考えないとダメです。平和だけを唱えていてもだめだと思っています」

慰霊祭を通して英霊と向き合うことは、日本人の原点と誇りを思い起こさせてくれると、改めて思いを強くする。

以上

特攻隊員家族への手紙

瀬野キヨ子

出撃を間近にした特攻隊員と面会した女性が隊員のご両親にあてた手紙です。

実物は「海上自衛隊鹿屋航空基地資料館」に展示されています。

当会会員の茂木久様が筆耕して下さいました

◇

始めてお便り致します。見も知りもせぬ者より不意にお便り差上げさぞかし吃驚なさいました事でございませう。私は去る四月五日思ひ掛けず貴家の御息様と面会し親しくお話も致し又ご依頼をうけましたのでつたない文ながらこうしてペンをとった所でございます。

去る五日の午前十一時私の義兄と戦友だといふ森丘少尉といふ方より私の姉に「是非今日中に面会したい故お出で下さる様に」との使ひが参りました。丁度私の姉は母の看護に鹿児島に行き留守でございましてその様に傳言致しました所又使ひの人が見え「妹さんでもよろしい是非来て下さい」とありましたので何か重大な用事でもあるのだらうと思ひまして次の汽車も待たず一里餘りあります面会の場所まで急いで参りました。面会の場所と申しまして山の中の線路にそった畠でございませう。丁度到着致し

ましたのが午後一時頃。しばらく、露や花等摘み乍ら待つておりますと飛行服に身を固めた立派な方が三人いらつしやいました。

もし人違ひでもしたらと思ひましたので黙つておりますと三人の中の先頭の方が後ろの方に「おーい森丘来ていらつしやるよ」とおつしやいました。今から思ひますとその方が岡部さんでした。

「用事とて別になかったけれど山藤(義兄)が近くだから暇があったら行けと云つたがその暇がないのでせめて面会だけでもしたかったのです」とおつしやいました。岡部さんは森丘さんと戦友で私の義兄も元山でよく知っていたと云つていらつしやいました。私の行きました事をとでも三人とも喜んで下さいましたが中でも岡部さんが非常に喜んで下さいました。「僕の家は男の子は僕一人なんです。今度女学校を卒業した妹がいます。上級学校に入るようになってるんですが休校らしく今田舎の家へ帰つております」とおつしやられてしばらく腰を下ろした草を眺め乍ら黙つていらつしやいました。きつとお家の事を考へていらつしやるのではないかと思ひ「お家の方は御存知ないのせうね。お會ひしたいでせう。お家の方もどんなに逢ひたがっていらつしやる事と申しました所岡部さんは「父には最近會ひました。父はあきらめ

てゐると思ひますが母のことが・・・と云つていらつしやいました。しかしこうおつしやいましても至つてほがらかで元気でした。「僕は元気です。とても元気で出撃して行つたと父母に云つてやつて下さい」とこれは三回も繰返しておつしやつた言葉です。この事を傳へる為にもこうしてお便り書きました。

これが明日死んでいかれるお方か知ら？と思ふ位お元気で愉快そうでした。これと一緒にいるいろいろな方への葉書きも發送致しますが、それ等お頼みになる時岡部さんが「こんな所でこんな方に會へるとは思はなかつた、もう思ひ残す事はないよ。これも森丘、お前のお蔭だ」とおつしやいましたら「いや俺に礼いな。礼いふなら山藤に云つてやれ」と云つて笑つていらつしやいました。私の様な者が参りましたのにこれ程喜んで下さつたかと思ふと勿体無いやら行つてよかつたと心から思ふ事とございませう。「死ぬのにも入りませんよ。この本をあげませう」と云つて手にしていらつしやつた「獄中の記」と岩波文庫の「」を下さりわざわぎサインして下さいませう。「バンドを二本持っているからあげませう」と云つてバンドと手拭も下さり又「葉書や切手は必要ありませんか。貰つて下さいませんか」とおつしやいましたので「こんなにいるいる戴きましたのに」

と辞退致しますと「持っていては何にもならないです。使ひ残りで失礼ですが貰って下さい」とおっしゃいますので「では遠慮なく戴きます」と云ひましたら「そう云って戴かないと困るんです。本当に失礼なんですからね。あ、これでさっぱりしたぞ」と持ち物が空になった事をとても喜んでいらつしやいました。この言葉は全部岡部さんがおっしゃいました。そのまゝの詞です。こう書いておきますと、あの日の元氣な笑顔が浮んで来たりません。とてもとてもお元氣でした。「皆様のお名前もラヂヲで発表になるのでせうか」と聞きました所「いや全員特攻隊ですからね。僕達なんか発表になりませんよ。でも立派に轟沈させますから待っていて下さい」とおっしゃいました。「すまないなあ僕達の為におざわざこんな所まで歩いて来て戴いて・・・その上随分お待たせしましたね」とおっしゃってから私が岡部さんに戴きましたのをおくくつてゐるのを見て「還つて迷惑でせう。そんなのを差上げて・・・ことお笑いになりました。まだまざまざとあの時のお言葉が耳に残つてゐる様でございます。

の方と一緒に鉄道線路まで出て二つの道にそれぞれ別れたのですが「しつかりやつて下さい。成功をお祈り致します」と申し上げますと「有難う後の事は頼みますよ」とおっしゃいましたので「お便りの事でせう。確かにお引受け致します」と申しました所「いやその事ではありませんよ。後の世の中の事です」とお笑ひになり乍ら帰つて行かれました。歩いて帰り乍らも御三人のお言葉が耳に残り、帰つてからも今日の出来事がまるで夢の様な氣がしてなりません。お話ししてゐる時には三人の方のほがらかに、私も少しも明日死なれる方々とは思はずいろいろお話致したのでございますが、帰りますといろいろの思ひ感激が一時に込みあげつい泣いてしまひました。お家の方々はどんなにか逢いたがり御武運を祈つていらつしやいますのに、國の為とは云へ、そのお心はいざ知らず、お見受け致しました所淡々と“死”を当然の事と思つていらつしやいますお姿につい泣かされてしまひました。本當に國の為とは云へあんな立派な方々を・・・惜しい氣持が致しますが、國を救ふ為には立派な方々がその礎石となつてくださらなくてはならないのでせう。

「どうせ死んだ子なら出来るだけ詳しく生前の様子が親は知りたいものだからと申しますので、早速お便りしやうと致しました。その日の夕方又使ひが参り「お頼みの件五月一日まで遅遠せられたし」とした書きものを持つて参りましたので他の便りもお知らせするの待つておりました矢先、丁度八日の午後一時頃でございます。「御免下さい」と云つて入つていらつしやいました飛行服の方を見て夢ではないかと吃驚致しました。それが岡部さんなのですもの。も一人戦友だと云つて田中少尉とお二人でした。「六日に出たのですが故障で途中から引返してきました。今日も雨で出られず暇でしたから遊びに来ました」とにこにこし乍らおっしゃいました。見ると春雨に飛行服もぬれております。「遠い所をわざわざ・・・雨も降つておりますのに、ひどかつたでせう」と申しますと「思ひの他遠かつたやつと着きましたよ。此の間歩き方はひどかつたでせう」とかへつていたはられてしまひました。早速飛行服をぬいで戴いて、足がよごれてゐるから上がらぬとおっしゃいますのを無理に上がつて戴いて母がおられませんので満足な事が出来ませんでした事を残念に思いますが、ただ

三時過ぎ帰隊の時間もお迫りになったものと思ひお別れを告げますと、そこまで一緒に帰りませうとおっしゃつて三人

心ばかりのおもてなしをさせて戴きました。下手な料理に満足して下さりお酒も少し召上り、まづいお団子をととても美味しく戴いて下さいました。「森丘も野村(三人の中の一人)も戦艦を轟沈しました。どうせ行くとはわかっていても盛大に見送られて一人還つて来るのはバチが悪いですよ」といつて笑つていらつしやいました。又「明日はお天気になれば良いかな、雨が降れば僕達が行けぬから日本は不利なのですよ」と自分の死などは考えず御国の事のみ憂へていらつしやるのは本当に感激致しました。宿舎はどこですかとお聞きしますと、今度私の赴任する所でございますのに又吃驚致しました。私とその事をお話致しますと岡部さんも吃驚なさり「自分達はこちらから三番目の部屋ですよ。暇があつたら面会もできますよ」と云つて雨の止んだのを幸ひ、四時前隊へ帰つてお行きになりました。もう亡くおなりになつたものと思ひ心より御冥福と祈らせて戴いておりましたのに・・・こうして再びお會ひ出来ました事を嬉しく又感謝致しております。この元氣な御様子をお家の方が御覧になつたら・・・

間合います様にと祈りつ、行きました。まだ澤山いらつしやつたのでほつとしつ、「岡部少尉はいらつしやいませんでせうか」とお一人の方に尋ねましたら部屋に向かつて餘り大きな声で面会だとおつしやいましたので、こんな所で差上げては迷惑と思ひそのまゝ去りましたが折角お依りしたものを・・・「戦闘機に一人乗るのは寂しいですからね。お人形とお話して行くのですよ」とおつしやつていた森丘少尉の言葉等を思い出し是非お届しようとして又引返して裏より廻つて行きました所大部分の方は庭で遊んでいらつしやいました。たつた一人でオルガンを弾いていらつしやいました。何の歌かは一寸記憶にございませぬ。あまり熱心な御様子でしたので友達と二人で行つたのですけれど氣後れして近寄れませんでした。「オーっ岡部出撃だ」といふ戦友の方の聲に「オー」と云つて。パツとオルガンを弾くのをやめて立上られました。この機を失つてはと思ひ「愚作ですけれどもどうぞお持ちになつて下さい」とお渡し致しますと「有難う。先日はいろいろ有難うございました。出撃です。さやうなら」と敬礼してさつさとお行きになりました。その日散髪なさつたのです。九日の午前十一時過でした。銀翼を連ねて沖繩へ向ふ特攻機を見送りながらあの何番機だらうと思ひつ、無事御成功を祈る事

でございました。あんなにお元氣で御出撃になりましたからきつと大成功だった事と信じております。「急に死の報を受けると母が吃驚しますでせうから便りで知らして下さい。大元氣で行つたといふ事を・・・ことおつしやいました。が五月一日を待つて便り致します所です。

公報がございましたでせうか。親しくお話致しましたので人事とは思はれませぬ、お家の方々のお氣持ちが偲ばれ胸一杯でございませぬ。詳しくお知らせ致そうと思ひ、思ひ出のまゝに書きましたので還つてお悲しみを増すのではないかと心配致しております。後で預かりました日記を送ります。「送れなかつたら書いてある所丈破つて封筒で送つて下さい」とおつしやいましたからそう致します。

子供の最後は誰でも詳しく知りたくと思ふのが常でございませう。私もそのつもりでそのまゝをお知らせ致しました。乱筆乱文思ひ出のまゝでさぞかし讀みにくい事ではございませうがこの便りで御息様の出撃前の元氣なお姿を御想像下さいませれば幸ひと存じております、

ではこれにてつたなき。ペンをおきます。何卒御留愛下さいまして健やかにお過ごし下さいませ。

かしこ 岡部少尉の
父母上様 きよ子より みもとに

ト號空中勤務必携(1)

編集長 金子 敬志

日本陸軍の特攻のマニュアルと言え
るものです。

しかし、発行期日が昭和20年5月25日
と、沖縄特攻作戦の終わりに近く、終戦

極秘

昭和二十年五月

と號空中勤務必携

下志津飛行部隊

間際の頃、本土決戦に備えて多数の特攻
隊が編成されていましたが、当時、群馬
県館林の陸軍飛行場で訓練中であつた第
173振武隊の隊長であつた堀山久生中
尉(陸士57期)は、その著書「館林の空」
に書いておられますが、「1995年発
行の書籍により初めて本必携を知り、各

方面に照会したが、当時の隊員等で誰も
之を読んだ人は出てこなかった」そうで
す。

実際の使用されたかには疑問がありま
すが貴重な資料と思ひますので、今後数
回にわたつて掲載致します。

本必携ハ管部隊一職員ノ研究
シタルモノニシテ尙推敵ノ餘
地アルモ取敢ヘズ参考ノ爲配
賦ス

昭和二十年五月二十五日

下志津陸軍飛行部隊

目次	次
1 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	23
2 シタルモノニシテ尙推敵ノ餘地アルモ取敢ヘズ参考ノ爲配賦ス	24
3 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	25
4 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	26
5 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	27
6 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	28
7 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	29
8 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	30
9 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	31
10 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	32
11 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	33
12 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	34
13 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	35
14 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	36
15 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	37
16 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	38
17 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	39
18 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	40
19 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	41
20 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	42
21 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	43
22 本必携ハ管部隊一職員ノ研究	44

極
秘

昭 和 二 十 年 五 月

と 号 空 中 勤 務 必 携

下 志 津 飛 行 部 隊

昭 和 二 十 年 五 月 二 十 五 日
下 志 津 飛 行 部 隊

本 必 携 は 当 部 隊 の 一 職 員 の 研 究
し た る も の に し て な お 推 敲 の 余
地 有 る も 取 敢 え ず 参 考 の 為 配 布
す

目 次

- | | | | |
|----|--------------------|----|------------------|
| 1 | と号機、と号部隊とは | 23 | 衝突直前 |
| 2 | と号部隊の本領 | 24 | 部隊攻撃（部隊長の責任） |
| 3 | と号部隊長となったら | 25 | 僚機はどうする |
| 4 | 部隊長として突撃要領をどうして決める | 26 | 突撃時の注意 |
| 5 | 飛行場を歩け | 27 | 突撃方法 |
| 6 | 盛装する愛機を操縦する | 28 | 部隊攻撃要領 |
| 7 | と号部隊員の心得 | 29 | と号機装備一覧表 |
| 8 | 攻撃実施 | 30 | 米主要機諸元表 |
| 9 | 行進隊形 | 31 | 米空母対空兵器装甲想定表 |
| 10 | 航進間敵機と遭遇したら | 32 | 船団態勢の一例 |
| 11 | 中途から帰らねばならぬ時は | 33 | 上陸船団の一例 |
| 12 | 中途から帰って着陸する時は | 34 | 艦船種別に依る出血効果及び諸元表 |
| 13 | 攻撃 | 35 | 雲の利用法 |
| 14 | 回頭、隊形変換とは | 36 | 気象（台風の構造） |
| 15 | 機動とは | 37 | 雲の種類及び其の特性 |
| 16 | 特攻機艦船撃沈可能判定図 | 38 | 日照月照図 |
| 17 | 図表の使用方法 | 39 | 風力階級表 |
| 18 | 突進 | 40 | 電波警戒地帯通過要領の一例 |
| 19 | 各種攻撃法の特長 | 41 | 電波警戒機に対する戦闘 |
| 20 | 急降下攻撃 | | |
| 21 | 超低空攻撃 | | |
| 22 | 衝突点 | | |

(1)

吾レハ
 天皇陛下ノ股肱ナリ
 國體ノ護持ニ徹シ
 愼久ノ大義ニ生キム

(2)

トハ機號ト	トハ部隊號ト
右部隊ニ使用スル飛行機ヲ謂フ	敵艦船攻撃ヲ為高級指揮官ヨリ必中必殺ノ攻撃ヲ命ゼラレタル部隊ヲ謂フ

3)

生死ヲ <small>神</small> 眞ニ捨身必殺ノ精ヲト 超越シ卓拔ナル戦技ヲ以テ 獨特ノ戦闘威力ヲ遺憾ナク發揮シ 航行ニ放ケル又ハ敵艦船艇ニ奮進此レヲ泊地衝突シ 必沈シテ敵ノ企圖ヲ西復滅シ 全軍戦捷ノ途ヲ拓クニ在リ	トハ部隊ノ本領
--	---------

(1)

吾は

天皇陛下の股肱なり

国体の護持に徹し

悠久の大義に生きん

(2)

と号部隊とは

敵艦船攻撃のため高級指揮官より必中必殺の攻撃を命ぜられたる部隊を云う

と号機とは

右部隊の使用する飛行機を云う

(3)

と号部隊の本領

生死を超越し

真に捨身必殺の精神と卓抜なる戦技とを以って

独特の戦闘威力を遺憾なく發揮し

航行又は泊地

に於ける敵艦船に驀進衝突し
此れを

必沈し敵の企図を覆滅し

全軍戦捷の途を拓くに在り

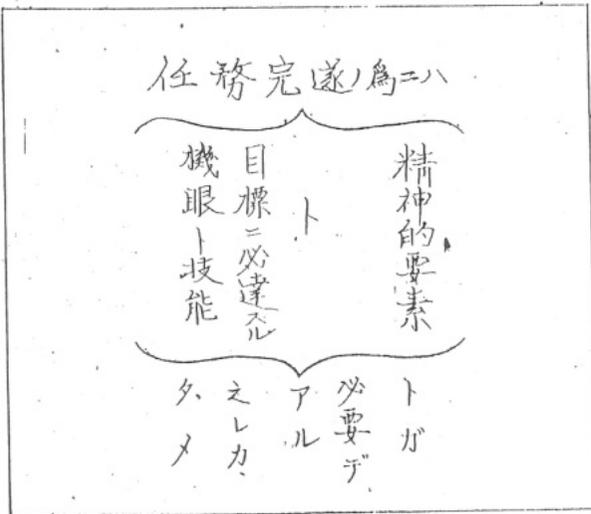
(4)

先ツ
肚ヲ決

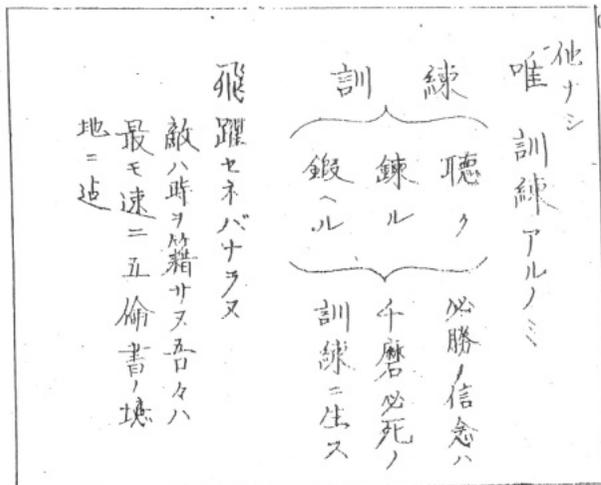
メヨ

而ル後

(5)



(6)



(4)

先^まず
肚^{はら}を決めよ

而る後

(5)

任務完遂の為には

精神的要素と

目標に必達する機眼と技能

とが必要である

これがため

(6)

他なし

唯 訓練あるのみ

訓練

聴く

錬る

鍛える

必勝の信念は千磨必死の訓練に生ず

飛躍せねばならぬ

敵は時を貸さぬ我々は

最も速に五倫書の境地に迄

(7)

愛機ト 共ニ飛ビ 共ニ死ス 唯操縦一本	顧ミルニ何カアラン 必沈為ハ 體操氣 (苗)(縦)(魄) ノ一致
------------------------------	--

(8)

明ラカニセヨ 公私ノ別ヲ コノ時ガ 公明ニ懇切ニ相談ニ來ツテヤレ 親切心ヲ足ラナイ為ニ部下ヲ誤ラス コトガアツテハナラヌ	團結ヲ團レ 部下ト共ニ爆碎スルコトヲ 死タゲトノ軍人絶対ノ死生 観ニ徹シ英ヲ語リ共ニ笑イ共ニ泣ク 部下ハ決メテ耳ルガ整理(環境) がおもて年ナクモテ 最後ノ戦及愛ヲ残シテ示スハ	先ヅ 伎倆並艶ヲ示セ 此レが飛行部隊(部隊) 統率ノ特長デアル	と號部隊長(指揮官)ニナツタラ
---	--	--	-----------------

(9)

使ヘ 部下ヲ 信ズルハカナリ 意圖ヲ明示シ腕ヲ 發揮サセヨ	部下ニ 在セツキリ ニスルナ 重裝備機ノ操縦ハ 雲中突破ハ 部下ニ要求スル前ニ自テ 飛ハナイ文句ハ一文 ノ價値モナイ	訓練デハ 鬼トナレ 全身全靈ヲ打込テ軍紀 ノ存スル處断ジテヤレ 飛行場デハ過情ヲ示スナ
---	---	---

(7)

必沈の為には

氣(魄)

操(縦)

体(当)

の一致

顧みるに何かあらん

唯 操縦一本

愛機と

共に寝

共に飛び

共に死ぬ

(8)

と号部隊長(指揮官)となったら

先ず技量の範を示せ

此れが飛行部隊(小部隊)統率の特長である

肚を割って団結を図れ

部下と共に爆砕するのだ

死ぬのだとの軍人絶対の死生観に徹し

共に語り共に笑い共に泣く

公私の別を明らかにせよ

肚では決めているが整理(環境)が出

来ていない者もある

最後の戦友愛を残りなく示すのはこの時だ

公明に懇切に相談に乗ってやれ

親切心が足りない為に部下を誤らすこ

とが在ってはならぬ

(9)

訓練では鬼となれ

全身全霊を打込んで軍紀の存する所

断じてやれ

飛行場では温情を示すな

部下に任せっきりするな

重装備機の操縦は

雲中突破は

部下に要求する前に自ら飛べ飛ばない

文句は一文の価値もない

部下を使え

信ずるは力なり

意図を明示し腕を発揮させよ

5 敵隊料算	4 敵慣用戦法	3 突撃手段	2 突撃準備	1 攻撃下令記號	(10) 隊長(指揮官)下シテ 突撃要領ヲトウシテ決メル
敵隊料算 常ニ新ミイテ情報ヲ得ケ	敵慣用戦法 機動部隊ハ輸送船團ハドシテ敵形カド シテ行動ヲルルガ常ニ新ミイテ情報ヲ 得ケ然レドモイテ 直捷ニ同地ハトウケル	突撃手段 急降下力 超低空力	突撃準備 目標ノ配置ハ状況ノ變化ニ應 ジ得ル様ニ種々場合ヲ起切 ニ示シテ置ケ	攻撃下令記號 無線ニヨルカ 翼ヲ振ルカ 手ヲ振ルカ	

11 攻撃中途中途カ 還ラズトスル時	10 縦上ノ注意	9 突進及突撃時 高度差處理	8 假種類應 急衛突點	7 艦船種識別	6 局地氣象
				大キキヨ比較セヨ 回航ハナイカ 油槽船トモト空母ト模ルナ 般機空母トハナイカ 敵艦隊戰力ハ区ヲ別ニテ母艦モ見ル	東月ノ吹イテ 西月ナラ 判ハルハ 雲ノ露カ

(12)

飛行場ヲ歩ケ

○シミミミト歩ケコノ飛行場ハ命
中ヨ左右スル鍵ガト云フ氣持テ
一般ノ地形ト地盤ハ

○滑走路ハ 長サハ 幅ハ

○滑走路外ヲ使ツ場合ハ

○方向ノ變化ニ應ズル離陸目標ハ
ドレトドレカ

○拂曉薄暮ノ場合ハ

○障碍物ハ 電柱カ木カ家カ
山カ

- (10)
- 隊長（指揮官）として
突撃要領をどうして決める
- 1 攻撃下令記号
- 1 無線によるか
- 2 翼を振るか手を振るか
- 2 突撃のやり方
- 目標の配当状況の変化に応じ得る様
各種の場合を懇切に示し置け
- 3 突撃法
- 1 急降下か
- 2 超低空か
- 4 敵の慣用戦法
- 1 機動部隊は輸送船団はどんな隊
形かどんな行動をするか（常に新
らしい戦訓を積み）
- 2 天気はどうか雲があつたら
- 「スコール」があつたら
- 3 敵戦闘機がいたら
- 4 直掩―間援はどうなる
- 5 敵採るべきと号部隊対策
常に新しい情報を聴け
- (11)
- 6 局地気象
- 東風が吹いたら 西風なら
朝か 晩か
雲か 霧か
- 7 艦船種識別
- 大きさを比較せよ
- 囚船ではないか
- 油槽船LCP等を空母と誤るな
- 偽装空母ではないか
- 敵は輸送船に「カンバス」を張つ
て空母に見せる
- 8 艦の種類に應ずる衝突点
- 9 突進及突撃時の高度及速度処理法
- 10 重装備機操縦上の注意
- 11 攻撃中途から還らねばならぬ時
- (12)
- 飛行場を歩け
- 「しみじみ」と歩けこの飛行場は命
中を左右する鍵だと云う気持ちで
- 一般の地形と地盤は
- 滑走路は 長さは幅は
- 滑走路外を使った場合は
- 方向変化に應ずる離陸目標は「どれ
と「どれ」か
- 払暁薄暮の場合は
- 障害物は電柱か木か家か山か

(13)

盛裝重裝備シテ愛機ヲ操縦スルニハ	目標ヲ定メテ正シク愛機ヲ静置スル	離陸滑走ハ直進セヨ	芽施回ハ
深呼吸 一度一ニ度一ニ度 合調音ニシテヤエウシヨウノ調子ヲ	飽クマテ直進 蛇行スルト脚ガ参ル	最少限 Hニヨリ米後	施回角 五度以内テ ヤシワリト頭ヲ押ヘテ

(14)

安定	縮降構成ヲ焦ルナ	空中操作ハ總テ緩降ニ	上昇ニハ	降下ハ
手ト足ト一致特ニ足ト使ヒテ注意セヨコソガ益裝機操縦ノ特長ナ	益裝機ノ動作ハ鈍クナリテキル惰性處理ハ常ニ速メセヨ	「パイ」ベシツテ其他ヲウケテ調和サセヨ	▽ヲ稍々多ク旋回角度ヲ稍少ナク失速ハ大禁物	思ツク量ノ倍下ル惰性處理ハ六テ敷シイ

5)

と號部隊員ノ心得	健康ニ注意セヨ	純情朗朗ナレ	精神要素ノ修練ヲナセ
身体ノ具合ガ悪クテ快心ノ体當リハ未腹ハ減ツテハ戦ハ出来ナイト同じヨウニ下痢ヲシテキルハ操縦桿ノ力ヲ入ラズテ其ガ下ヲ判斷カ狂フ	忠誠ノ武人ハ必ラズ此情アル者ナレ	自己ノ技能ヲ最大限ニ發揮スル爲ニハ容辱ヲ受ルルヲ素地ヲ造リテ置キテハナラズ之ト即チ壯ガアル精神第一 枝柄若ニト区別シテ若カアルハ 心技ハ鈍クテ併行デアリニ致 テアル技ヲ束ツケルモノ心デアリ心ヲ表ワシハ技デアル	

(13)
盛装（重装備）した愛機を操縦するに
は

目標を定めて正しく愛機を静置する
深呼吸
一度―二度―三度
合調音「や」「きゅう」「じょう」
の調子だ

離陸滑走路は直進せよ
飽くまで直進
蛇行すると脚が参る

第一旋回
最小限 H二〇〇米 後
旋回角 五度以内で
「やんわり」と頭を押えて
H…高度

(14)

安定

手と足の一致 特に足の使い方
に注意せよ これが盛装機操縦の
特徴だ

編隊構成を焦るな
盛装した愛機の動作は鈍くな
っている
惰性処理は常に速めにせよ

空中操作は総て緩徐に
「レバー」「ペラピッチ」そ
の他をうまく調和させよ

上昇は
Vを少々多く
旋回角度は稍小さく
失速は大厳禁

降下は
思った量の倍下がる
惰性処理はむつかしい

V…速度

(15) と号部隊員の心得

健康に注意せよ

身体の具合が悪くては快心の体当りは
出来ない
腹は減っては戦が出来ない同じように
下痢をしていては操縦桿に力が入らぬ
熱があつては判断が狂う

純情明朗

忠誠の武人は必ず純情なる孝子である

精神要素の修練をせよ
自己の技能を最大限に發揮する為には
發揮できるだけの素地を造って置かな
ければならぬ 之が即ち肚である精神
第一技量第二と区別する者があるが心
技は飽くまでも併行であり一致である
技を裏づけるもの心であり心を表すも
のは技である

連載 山ある記30 埼玉県「四阿屋山」

会員 池田康博

この山は「あずまやさん」と読む。長野県にも同じ漢字の山があるようだ。紛らわしいのは、同じ長野県の百名山「四阿山」で、これも「あずまやさん」と読む。いや、百名山の四阿山を紛らわしいと言うのは失礼というもの。四月中旬、埼玉県にある、紛らわしい名前の「あずまやさん」に登った。

四阿屋山は、標高七百七十二m、秩父郡小鹿野町の「道の駅 両神温泉薬師の湯」を出発地として、コースタイムは、登り1時間55分、下り1時間20分、歩行距離約5.5Kmの山である。

8時30分に道の駅を出発、県道を少し戻り、両神神社薬師堂から左折して登って行くと、左手に「花菖蒲園」が現れる。ここが「薬師堂コース」のスタート地点である。花菖蒲園は、鹿の食害防止のため、網で囲ってあったが、入口と出口を開けて頂いて、小さな沢を渡って山に入った。

最初の斜面一帯は福寿草の園地でもある。今はその季節ではないが、その中を良く整備された標識に従って登って行く。コースには分岐が幾つかあるが、地図まで付けた案内が備えてあり全く不安はない。

い。要所にはベンチも設置してある。

ウグイスの上達した鳴き声が響く中、9時45分に両神神社奥社に到着、拝礼した後、左脇を通って少し降って行くと前方に鎖場が現れた。四阿屋山名物だそうだが、崖に九十九折りの細い道を作って鎖を付けたという感じである。地図でその等高線を測ると50m程ある。ここを、ストックをたたみ、手と鎖を使って登って行く。そして、頂上直下の尾根に着くと、今度は急傾斜の岩場が待っていた。

頂上までは約20mの高さであるが、ここを這い登って10時5分、山頂に着いた。頂上は狭く、4〜5名で一杯という感じである。

鎖場の崖



木の枝も伸びて、見晴らしもあまり良くない。ただ、百名山の両神山だけは、間に、その全体を見ることが

山頂から見た両神山



そうだが、感慨深く眺め続けることが出来るものだ。とは言え、10時05分には下山開始。令和3年には滑落事故が発生して

ることもあり、登り以上に慎重に下っていく。奥社まで戻ったところで道を換え、「鳥居山コース」で下ることにした。このコースは、ほぼ尾根歩きの本道である。快適な山道を淡々と歩き、休憩もしながら、下山口に近い「観景亭」まで戻った。

観景亭の周りには、きれいな花木が植えられている。その花の中、コジユケイの呼ぶ声を聞きながら、11時33分下山口の道路に出た。その真向かいには「花菖蒲園」である。道の駅に到着したのは11時45分であった

出来た。

嘗て登ったことのある山は、どの山も

(令和5年4月17日)

震 洋

片浦基地之碑

会報134号から始めた特別攻撃隊全史第二版の顕彰譜の
ご紹介第十五回目です。



碑文

太平洋戦争の末期米軍機動部隊の吹上浜上陸作戦を阻止するため海軍第
一二四震洋特別攻撃隊「有田部隊」がこの地に配備された。終戦時（昭和
二十年八月十九日）不幸にして八名戦死の爆発事故が発生した。
この度笠沙町当局の御協力を得て当時の隊員及び関係者がつとめ戦死者の
慰霊と祖国永遠の平和を祈りこの碑を建立した。

昭和五十六年八月

所在地 鹿兒島県南さつま市 守護団体 第一二四震洋隊

笠沙町崎ノ山字片倉 有田部隊の会

建立 昭和56年8月19日 (代表) 崎向幸和

慰霊祭 8月19日



特 潜

特潜碑

嗚呼特殊潜航艇



建碑記

昭和十六年十二月太平洋に戦端開くや長駆してハワイ軍港に潜入 米艦隊主力を強襲して緒戦を飾れるは我が特殊潜航艇甲標的なり即ち特別攻撃隊の初とす 次で西にマダガスカル南はシドニーに遠征英濠艦隊を震撼せしめ全軍の士気大いに振う 更にキスカにソロモンに転戦して戦局を支え 特運筒また前線の補給に挺身す 時に部隊は基地をここ大浦崎に設け訓練また死生の間に進むも 戦勢ようやく有利ならず敵軍しきりに我が近海を侵す 我隊これを各地に迎え撃ち ミンダナオに沖繩に蛟龍の戦果見るべきあり 回天またこの地に發して奮迅し 海龍ともども本土決戦に備う 二十年八月遂に兵を取め戦没並びに殉職の英霊三百余柱を数う 戦友ここに相計り その勇魂を迎慕し 特殊潜航艇の偉功をとどめて後世に傳う

昭和四十五年八月

特殊潜航艇関係者有志建之

祭 神

九軍神を始めとして特殊潜航艇関係(過去に在籍した者を含む)の戦没者・殉職者等計四四〇余柱

所在地

広島県呉市波多見八幡山神社境内

交通

呉駅より倉橋方面行きバス約40分波多見下車

建立

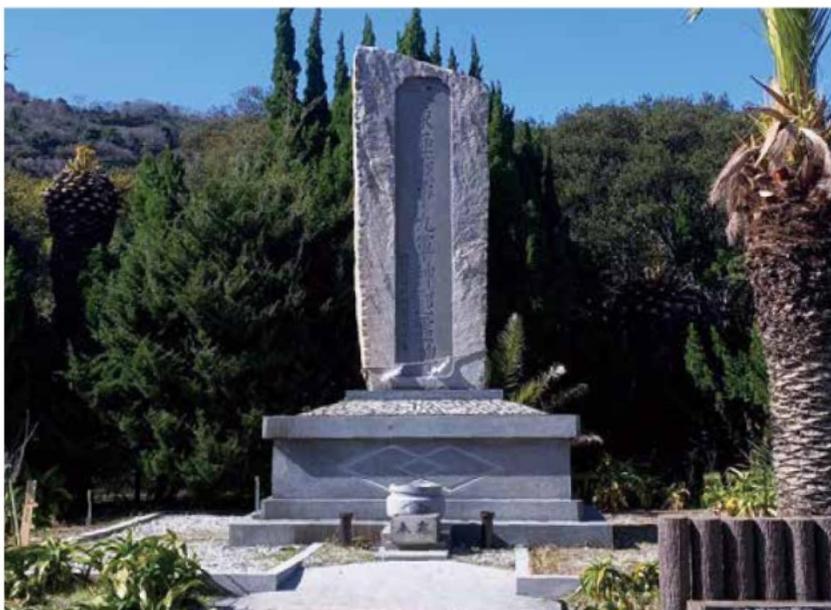
昭和45年8月22日

例 祭

毎年5月第3土曜日

特 潜

大東亜戦争九軍神慰霊碑



建碑記

噫、殉国忠勇平和礎石ノ九軍神、昭和十六年（一九四一）十二月八日ノ未明大東亜戦争ノ先陣トシテ、ハワイ真珠湾攻撃ニ挺身決死隊第一号ノ面目躍如、輝ク戦果ヲ挙げ、マタ能ク我空軍爆ノ蜂火トナリ海空呼应壯絶無比ノ一大緒戦ヲ展開自ラハ従容愛挺ト運命ヲ与ニシ壮烈湾深キ所浪ノ華ト散リ行キシ九軍神、三机湾ハ日本ノ真珠湾トシテ諸勇士ト特殊潜航艇ガ一心同体生死諦観決死ノ猛訓練基地トナリ、海神ヲ哭カシメル門外不出ノ秘境デアッタ十七年三月九軍神ノ勲功氏名ノ発表セラルルヤ沈思果敢天晴ノ最期ニ驚嘆シ三机ノ人々ハ感泣シタ、当時若桜ノ九軍神、マダガスカル、シドニー等テ散華シタ諸勇士ガ三机ニ遺シタ逸話美談ハ一斉ニ花ト咲イタ歌書ヨリモ軍書ニ悲シ三机湾モ今ヤ戦争ノ真珠湾カラ平和ノ真珠湾ニ衣更エ、日米ヲ真珠ヲ結ブ山紫水明ノ平和境トナリ觀光客モ次第第二ソノ数ヲ増シツツアル、九軍神ハ戦争ノ犠牲トナリ、マタ平和ノ礎石トモナル、戦争放棄平和憲法治下国土平安民生安定ノ福祉国家トシテ新生日本ハ逞シク前進スル。

嗚呼、芳シキカナ護国ノ英霊、瀬戸町有志ハ広ク浄財ヲ募ツテ軍神由緒ノ地ニ慰霊碑ヲ建立シテソノ功績ヲ敬仰スル、九軍神ノ英霊永遠ニ瞑セラレヨ。

昭和四十一年八月吉日建之

江山 二宮 鴻 謹書

宮司 阿部正雄 撰文

祭神 九軍神

所在地 愛媛県西宇和郡伊方町瀬戸八幡神社境内

交通 八幡浜駅より三崎行きバス約40分三机下車

建立 昭和41年8月

例祭 12月8日

祭主 瀬戸町青年団

写真提供 三机青年団

特 潜

小豆島(特潜) 忠魂碑



建碑記

大東亜戦酣ナルニ方リ軍ハ昭和二十年五月二日特攻潜艦基地ヲ当内海湾ニ設ケ其ノ部隊本拠ヲ小豆島中学校ニ置キ以テ急迫セル本土防衛決戦ニ備ヘント日夜訓練ニ従事ス然ル処同年七月二十二日坂手湾冲海上ニ於テ空襲ニ遭ヒ此ノ戦弾に於テ伊熊少佐会下九士戦死ス尋テ八月二日播磨灘に於テ機雷ニ触レ堀川中尉外五士職ニ殉ス同月八日女神丸屋島冲航行中機銃掃射ノ遭難ニ下山中尉外一士又散華ス然リト雖モ旺盛ナル士気何ゾ之ニ屈セン奮起以テ時ノ到ルヲ待ツ突如終戦ノ詔ヲ拝シ全軍非憤慷慨スレドモ奈何トモ為ス能ハズ大谷司令愛国ノ涙ヲ払ヒ切齒扼腕スル部下将兵ヲ慰諭シテ曰ク我等ノ任既ニ極マル唯一国民トシテ和平建国ニ尽サンノミト徐カニ隊ヲ解ク去ルニ臨ンテ将士相謀リ戦没勇士ノ芳ヲ不朽ニ伝ヘント茲ニ霊碑ヲ建ツ後人能ク慰霊敬慕ノ誠ヲ致サンコトヲ銘ニ曰ク

錦山秀岳聖海清温 十七英靈巖安陵園

一身殉国燦榮蒼尊 肅然吞淚敬弔雄魂

昭和二十年晚秋

郷土中学校教諭勲八等中村栄次広光撰并書

碑文

忠魂碑

祭神 昭和20年7月22日

芙蓉丸における戦死者

昭和20年8月2日

蛟龍にての戦死者

昭和20年8月8日

女神丸における戦死者

計一七名

所在地

香川県小豆郡小豆島町苗羽
八幡神社境内の宮山招魂社神域

特攻文芸

短歌・俳句・川柳の部



● 満開の 桜の花を 見るたびに

笑顔で征きし 貴方を想う

淳子

● 蕾にて 逝きし吾子らよ 花と咲け

淳

● 田植え前 水面に映る 逆さ富士

● 菜の花の 頭をなげる 春の風

ネコ

● 春近し 鼻で感じる 花粉症
● もう夏か 春短いぞ 温暖化

ネコ



事務局からの報告等

一 令和6年度 事業報告書

1 慰霊事業

令和6年度は、新型コロナウイルスの影響が若干残るものの、各地の慰霊顕彰活動もコロナ以前の状態に徐々に戻り始めた。このため、主催慰霊祭及び各地の慰霊祭も様子を見ながらの開催となった。

(1) 第45回特攻隊全戦没者慰霊祭

令和6年3月23日(土) 11時より、靖國神社に於いて、一般の会員も含めて、例年並みの昇殿参拝及び、その後の直会まで予定通り行った。

(2) 第73回特攻平和観音年次法要

令和6年9月22日(日、祝) 秋分日の午後2時より、世田谷山観音寺に於いて、一般会員も含めて神仏習合の法要を行った。こちらは感染防止の観点から直会は取りやめた。

(3) フイリピンマバラカット特攻慰霊祭

令和6年10月25日(金) 10月25日に最初の特攻機が発進した旧海軍マバラカット西飛行場跡において特攻開始80年を記念し慰霊祭を斎行した。これは、当地を管理する、現地のCIAAC (Clark International Airport Corporation) との共催。

	(時期)	(慰霊祭名)	(場所)	(参列代表者)
	3月21日	神雷部隊慰霊祭	鎌倉市建長寺	鮎田理事
	3月28日	特攻勇士之像慰霊祭	宮崎縣護國神社	石井専務理事
	4月6日	都城特攻隊戦没者慰霊祭	都城市	金子編集長
	4月6日	鹿屋特攻隊戦没者慰霊祭	鹿児島県鹿屋市	石井専務理事
	4月7日	戦艦大和追悼式	広島県呉市	原島評議員
	4月7日	第2艦隊戦没者慰霊祭	徳之島	鮎田理事
	4月7日	宮崎特攻基地慰霊祭	宮崎市	金子編集長
	4月7日	万世特攻隊慰霊祭	鹿児島県南さつま市	福江評議員
	4月14日	出水市特攻碑慰霊祭	鹿児島県出水市	岡部副理事長
	4月16日	偕行社慰霊祭	靖國神社	岩崎理事長
	4月17日	偕行社慰霊祭	靖國神社	岩崎理事長
	4月21日	国分基地特攻隊員慰霊祭	鹿児島県国分市	國分評議員
	4月22日	春季例大祭	靖國神社	岩崎理事長
	4月22日	特攻勇士之像慰霊祭	沖繩縣護國神社	石井専務理事
	4月23日	秋田県特攻隊招魂祭	秋田市	中村評議員
	4月29日	知覧特攻隊慰霊祭	鹿児島県南九州市	金子編集長
	5月3日	特攻勇士之像慰霊祭	福岡縣護國神社	岩崎理事長
	5月11日	特攻殉国碑慰霊祭	長崎県川棚町	原評議員
	5月12日	筑波海軍航空隊慰霊祭	つくば市	原評議員
	5月25日	三重航空隊慰霊祭	三重県津市	中村評議員
	5月26日	特攻勇士之像慰霊祭	千葉縣護國神社	金子編集長
	5月26日	予科練戦没者慰霊祭	土浦駐屯地	原島評議員
	5月26日	義烈空挺隊慰霊祭	熊本県熊本市	倉形評議員
	5月26日	指宿哀惜の碑慰霊祭	鹿児島県指宿市	石井専務理事
	5月27日	大東亜慰霊協慰霊祭	靖國神社	石井専務理事
	7月6日	特攻勇士之像慰霊祭	三重縣護國神社	石井専務理事
	8月9日	全国戦没者慰霊大祭	靖國神社	岩崎理事長
	8月15日	十三塚原特攻慰霊祭	鹿児島県霧島市	金子編集長
	8月15日	戦没学徒慰霊祭	広島護國神社	石井専務理事

(時期) (慰霊祭名)

9月8日	楠公回天祭
9月8日	高野山空挺慰霊祭
9月22日	串良基地慰霊祭
10月10日	特攻勇士之像慰霊祭
10月13日	特攻勇士之像慰霊祭
10月18日	秋季例大祭
10月18日	秋季慰霊祭
10月19日	明野忠魂塔慰霊祭
10月22日	特攻勇士之像慰霊祭
10月25日	神風特攻戦没者慰霊祭
10月25日	神風特攻慰霊
10月25日	永代神楽
10月26日	能代特攻像慰霊祭
10月26日	特攻勇士之像慰霊祭
10月26日	特攻勇士之像慰霊祭
10月31日	特攻勇士之像慰霊祭
11月10日	回天慰霊祭
11月23日	若潮慰霊祭
12月8日	九軍神慰霊祭

(場所)

岐阜県下呂市
和歌山県高野町
鹿児島県鹿屋市
長野県護国神社
茨城県護国神社
靖国神社
千鳥が淵墓苑
三重県明野駐屯地
長崎県護国神社
愛媛県西条市
フイリピン
靖国神社
秋田県能代市
大阪護国神社
高知県護国神社
埼玉縣護国神社
山口県周南市
香川県小豆島
愛媛県三机町

(参列代表者)

宮本評議員
高松評議員
岩村評議員
原評議員
原島評議員
岩崎理事長
岩崎理事長
倉形評議員
石井専務理事
石井専務理事
岩崎理事長
岡部副理事長
倉形評議員
原島評議員
藤田会長
岩崎理事長
石井専務理事
鮎田理事
鮎田理事

(4) 各地慰霊祭への参列等

規模の縮小や中止、あるいは、慰霊祭のみで直会を行わない等、各地で対応は異なったが、年度当初予定の51か所の参列予定に対し、実際に参列できたのは47カ所で、他は玉串料や供花を奉納した。

公益誌としての機関誌・会報「特攻」

148号〜152号の5ヶ号を発行し、会員・協力団体及び希望者に配布・頒布した。また、会の名称の普及、及び、若手会員の募集を狙って自衛隊向けの広報紙(朝雲新聞)に4回、隊友会の広報紙(隊友)に2回の広告を出すとともに、

2 会報の発行・広報

紙(朝雲新聞)に4回、隊友会の広報紙(隊友)に2回の広告を出すとともに、

SNSを活用した広報のために、FBやHPの更新を行った。

3 調査研究・特攻関連出版物等の作成等
 特攻隊及び特攻隊戦没者等に関する事項を調査・研究することにより、特攻に関する史実を伝承する活動として令和6年度は、担当理事を中心に調査研究グループの会合を開き、資料収集と調査研究方向の意見交換を行った。今後は、各地の関連資料館等との連携を密にし、収集した資料等の広報誌への掲載や、出版等を通じて、特攻に関する史実の伝承に寄与したい。

4 護国神社への「特攻勇士之像」建立奉納事業
 令和6年度は、岩手縣護国神社への奉納が出来、全52か所の護国神社等に対する奉納特攻像は23体となった。今後も引き続き他の護国神社等への説明を継続し、多くの国民が、特攻像を見ることにより、特攻隊員に対する慰霊・顕彰の気持ちを育てるような環境作りに努力したい。

5 会員の動向
 令和6年度における新規入会者は役員、会員による勧誘の努力もあり、やや回復し、60名にのぼった。しかしながら、退会者は会費未納3年による会員資格喪失

と高齢会員のご逝去等による退会も併せて99名となったため、令和6年度末会員数は昨年度より39名減少し、1,072名となった。

会員の減少傾向は、会の年齢構成から見れば今後も厳しい状況が継続するものと思われるが、会の魅力化による会員のつなぎ止めに努めるとともに、役員等を中心として、特に若手会員の獲得を重視して募集業務に精励し会勢の挽回を期したい。

寄付者御芳名(敬称略)

(令和7年1月1日～3月31日)

(単位千円)

一〇〇〇	多田野 弘	三〇〇	御船 滋	七	宮倉 崇	七	南方 弘	二	塚原 正	二	佐藤 一志	二	川本 修二
四〇	相田 博司	三〇	田中雄一郎	七	木村 圭作	七	伊吹笑美子	二	野村 朋美	二	川本 修二	二	川本 修二
二〇	遠山三千代	一七	福島 八郎	六	高橋すみ	五	廣川 恭子	二	山脇 智美	二	高松 真希	二	高松 真希
一七	粕井 隆	一五	降矢 達男	五	湯澤 利道	五	布施木 昭	二	生峯 和代	二	田村 政昭	二	田村 政昭
一五	藤永 雅彦	一五	吉田 三郎	五	小長 啓一	五	清水 典郎	二	桜井 實	二	沢田 進	二	沢田 進
一五	長岡 暢俊	一三	石黒 宥規	五	久貫 頌子	五	斉田 孝	二	正本 禎亮	二	山下 拓真	二	山下 拓真
一二	深水 彪	一〇	上西 幸子	五	河野 正信	五	島田 正登	二	渡部 晃	二	中熊 真一	二	中熊 真一
一〇	岩館 芳雄	一〇	茂木 尚	五	小堀桂一郎	五	加藤 千佳	二	吉田 紀	二	殿谷 章	二	殿谷 章
一〇	岩成 真一	一〇	鮫島美知子	五	袴田 和泉	五	加藤 拓	二	山本 寛	二	神保 明生	二	神保 明生
一〇	原島 淳子	一〇	柿崎 裕治	五	橋本 亀	五	林 佐吉	二	山本 寛	二	神保 明生	二	神保 明生
一〇	石井 令彦	一〇	多田 剛	五	太田 惠淳	五	伊藤 元夫	二	山中 進	二	広田 正勝	二	広田 正勝
一〇	紺野 真理	一〇	小田部哲哉	五	竹本 佳徳	五	秋元 光広	二	岩本 哲男	二	宇佐見英三	二	宇佐見英三
一〇	大鳥 美緒	一〇	久住 浩文	五	明石 英次	五	酒井 陽太	二	石川 武	二	島谷 基信	二	島谷 基信
一〇	大原 江	一〇	筋野 裕二	五	関 志高	五	戸祭 真生	一	上田 浩寛	一	村山 公一	一	村山 公一
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	八	隊友会	七	樺 孝則	三	佐藤 義信	三	中川 香織	三	中川 香織
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	岩浅 博之	三	氏家 康宇	三	氏家 康宇
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	竹野 好展	一〇	金子 浩	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	澤 知樹	一〇	田中 壽幸	七	今井 敏	七	倉田 邦男	三	奥村 仁則	三	島野 雅子	三	島野 雅子
一〇	知覧特攻慰霊顕彰会												

新入会員名簿 (敬称略)

(令和7年1月1日～3月31日)

一 佐多 和仁	一 江守 聖学
一 梶原 武	一 井本 徹
一 小山 哲	一 中村 剛
一 山下 博	一 長谷川輝人
一 松本 忠幸	
栃木 田中 壽幸	
埼玉 中郷 一英	
東京 表木 猛	
筋野 裕二	
田村 健	
神奈川 佐田 康昭	
有泉 圭吾	
大阪 西前 太郎	
岡本 ユウコ	
兵庫 山本 靖子	
岡本 芙美子	
岡本 浩史	
福岡 上村 理沙子	
上村 郁代	
熊本 酒見 奎一 (6・12)	
神奈川 正根 恵二 (6・12・15)	

会員訂報 (敬称略)

ご冥福をお祈りします。

会員ご入会のご案内

「特攻隊戦没者に感謝と敬意を」

当顕彰会は、先の大戦の末期、一つしかない命を、祖国の安泰と家族や大切な人のために捧げられた特攻隊員に対し「あなた達のことには忘れません。有難うございます。感謝します。私たちも努力します。どうぞ安らかに！」を胸に、慰霊・顕彰を行う団体です。これにご賛同して頂ける方ならどなたでも会員にお迎えいたします。多くの皆様のご入会をお待ちしております。

○当顕彰会の主な事業

- ・特攻隊戦没者の慰霊顕彰（他団体への参加を含む）
- ・会報の発行等による特攻及び戦没者の伝承等
- ・特攻に関する資料の収集、調査、図書等の貸出講演会等の開催その他

○年会費

- ・一般会員 3000円
- ・学生会員 1000円

○ URL: <https://tokkotai.or.jp>

QRコード



ご投稿についてのご案内

ご投稿に際しては、次の点にご留意くださるようお願い致します。

1 原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。可能ならば、ワードファイル、又はテキストファイルで頂ければ幸いです。PDFファイルは編集の都合上、お受けできません。

2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当顕彰会にお任せ願います。

3 投稿記事に関する写真がありましたら、なるべく添付して下さい。

4 原稿、写真等は、原則としてお返し致しません。が必要な場合はその旨お書き添え下さい。

5 会員以外の方の投稿も歓迎致します。

6、投稿記事等の送付先は、左記宛てとして下さい。

〒102-0072

東京都千代田区飯田橋一丁目5-7

東専堂ビル2階

公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会

電話 03-5213-4594

FAX 03-5213-4596

E-mail jimukyoku@tokkotai.or.jp

令和6年度正味財産増減計算書

令和6年1月1日から令和6年12月31日まで

付紙4

(単位:円)

科 目	当年度	前年度	増 減	備 考
I 一般正味財産増減の部				
1 経常増減の部				
(1) 経常収益				
① 基本財産運用益	12,197,667	22,235,745	△ 10,038,078	
② 特定資産運用益	475,000	362,500	112,500	
③ 年会費	2,217,000	2,235,000	△ 18,000	
④ 慰霊事業益	1,945,000	1,441,000	504,000	
⑤ 出版事業益	49,800	49,100	700	
⑥ 広報事業益	0	200	△ 200	
⑦ 受取寄付金	4,933,609	3,918,191	1,015,418	
⑧ 雑収入	1,726	115	1,611	
経常収益計	21,819,802	30,241,851	△ 8,422,049	
(2) 経常費用				
① 事業費	17,991,690	21,768,476	△ 3,776,786	
慰霊事業負担金	962,428	316,000	646,428	
像制作負担金	0	2,257,000	△ 2,257,000	
発送等委託費	2,177,187	3,179,071	△ 1,001,884	
他団体助成金	1,599,300	1,741,725	△ 142,425	
役員報酬	180,000	180,000	0	
給料手当	4,060,709	4,726,956	△ 666,247	
福利厚生費	514,031	514,031	0	
旅費交通費	2,986,020	3,558,080	△ 572,060	
通信運搬費	426,038	324,800	101,239	
会議費	122,482	192,679	△ 70,197	
光熱水料費	80,867	64,085	16,783	
消耗品雑費	447,625	337,676	109,949	
貸借料	2,134,956	2,152,800	△ 17,844	
臨時雇賃金	912,000	912,000	0	
印刷費	760,720	564,432	196,288	
減価償却費	80,126	132,185	△ 52,060	
諸謝金	210,000	152,356	57,644	
退職手当	0	0	0	
退職手当引当資産繰入	337,200	462,600	△ 125,400	
② 管理費	8,695,183	9,414,883	△ 719,700	
役員報酬	120,000	120,000	0	
給料手当	2,707,139	3,151,304	△ 444,165	
福利厚生費	342,687	342,687	0	
旅費交通費	1,990,680	2,372,054	△ 381,374	
通信運搬費	284,026	216,533	67,492	
会議費	81,655	128,453	△ 46,798	
光熱水料費	53,912	42,723	11,188	
消耗品雑費	298,417	225,117	73,300	
貸借料	1,423,304	1,435,200	△ 11,896	
臨時雇賃金	608,000	608,000	0	
印刷費	507,147	376,288	130,859	
減価償却費	53,417	88,124	△ 34,706	
退職手当	0	0	0	
退職手当引当資産繰入	224,800	308,400	△ 83,600	
経常費用計	26,686,873	31,183,359	△ 4,496,486	
評価損益等調整前経常増減	△ 4,867,071	△ 941,508	△ 3,925,563	
有価証券売却損益	0	0	0	
基本財産等評価損益	△ 3,042,086	△ 14,107,484	11,065,398	
当期経常増減額	△ 7,909,157	△ 15,048,992	7,139,835	
2 経常外増減の部				
(1) 経常外収益				
資産計上	1,170	0	1,170	
前期損益修正益	0	0	0	
経常外収益計	1,170	0	1,170	
(2) 経常外費用				
特定資産への振替	0	0	0	
貯蔵品資産償却	0	0	0	
経常外費用計	0	0	0	
当期経常外増減額	1,170	0	1,170	
当期一般正味財産増減額	△ 7,907,987	△ 15,048,992	7,141,005	
一般正味財産期首残高	301,187,638	276,029,460	25,158,178	
一般正味財産期末残高	293,279,651	301,187,638	△ 7,907,987	
II 指定正味財産増減の部				
一般正味財産から振替	0	0	0	
当期指定正味財産増減額	0	0	0	
指定正味財産期首残高	0	0	0	
指定正味財産期末残高	0	0	0	
III 正味財産期末残高	293,279,651	301,187,638	△ 7,907,987	